

説教 『聖と俗の絶妙な加減』 山本 護 牧師  
聖書 列王記上 19:11~12 / マタイによる福音書 8:1~4

イエスは山を下りる(マタイ 8:1)。山では何をしていたのか。延々と御言葉を説いていた(5:2~7:27)。それでは下山した里で何をしたのか。らい病人を清め(8:3)、百人隊長の僕を癒し(8:13)、ペトロの姑と多くの病人を癒した(8:15~16)。神の御言葉を語るだけでなく、その御心を現実に行なった。

イエスは再び山へ登る(14:23,17:1,26:30)。何のために幾度も登るのか。祈りを深め(14:23)、その身を神の啓示とするためだ(17:2)。山で心身が整うと里へ下りる。御言葉を必要とする世に身を置き、御心を明らかにし、それを実現するために。キリストに従う教会もこうした登山をして、下山する。教会は、里の世俗に染まってはいけない。かといって山で超然と隠棲することでもない。教会は山で御言葉を得(5:2~7:27)、里で御言葉を現わす(8:3)。教会はキリストと共に、山に登り、里に下りる。

下山したイエスに一人のらい病人がひれ伏し、「主よ、御心ならば、わたしを清くすることがおできになります(8:2)」と言った。変な日本語訳だが、御心を体現するイエスに、己が病の清めを求めているのだ。らい病からの回復は、治癒ではなく清めと表現される(レビ 13章)。病者の切なる願いに応え、イエスは「手を差し伸べてその人に触れた(マタイ 8:3)」。らい病者への接触は律法違反だが、「御心(8:2)」は掟を踏み越えてこれに触れる(8:3)。清められたその人にイエスは言う。「だれにも話さないように気をつけなさい。ただ、行って祭司に体を見せ、モーセが定めた供え物を献げて、人々に証明しなさい(8:4)」。はたして「黙っている」なのか、「人々に証明せよ」か、このあたりの加減は絶妙。

社会の安定は、人と人の間に障壁を建てることで保たれている。御心なる方は定められた障壁を、いささかの逡巡もなく乗り越え、「手を差し伸べてその人に触れた(8:3)」。イエスは律法を無視したように見える。ところが清めの判断は、律法通り祭司に委ねている(8:4)。この加減も絶妙だ。「わたしが来たのは律法や預言者を～廃止するためではなく、完成するためである(5:17)」。律法か、それとも信仰か。人はどちらかに決めたがるが、生ける神の御心は、固定された枠には決して納まらない。

イエスは、回復したらい病者に「行け(8:4)」と言った。判定するだけで助けることのない祭司の許に行け、と。「従って来い」とは言わずに、里という俗に留まるよう命じた。清められた者は、己が身に起こった人間の回復を、文字通り身をもって現わすことになるだろう。それはどのような回復だったか。イエスはらい病人のケガレを自らのケガレとし、深い交わりによって、そこに清めが生じた。

聖と俗は、人の能力ではなく、神の御手で結びついている。古代の預言者エリヤは、神の山ホレブで(列王上 19:8)神の声を聞く。「主は、[そこを出て、山の中で主の前に立ちなさい]と言われた。見よ、そのとき主が通り過ぎて行かれた(19:11a)」。その徴は非常にダイナミックで「主の御前には非常に激しい風が起こり、山を裂き、岩を砕いた(19:11b)」。だが神の存在を探すとエリヤでさえ、風の中にも、地震の中にも、火の中にも見出すことはできなかった(19:11c~12a)。しかし、神からの御手なら「静かにささやく声(でも)聞こえる(19:12b)」。イエスが差し伸べた手は(マタイ 8:3)、この声のような真の力。



【おまけのひとこと】

人々が暮らす俗なる里は 聖なる山に見守られている キリストは山に登る 里に下りるために 里を巡り 御身に 一人ひとりの俗を負い 聖を置いていく 気づかぬことも 気づくこともある